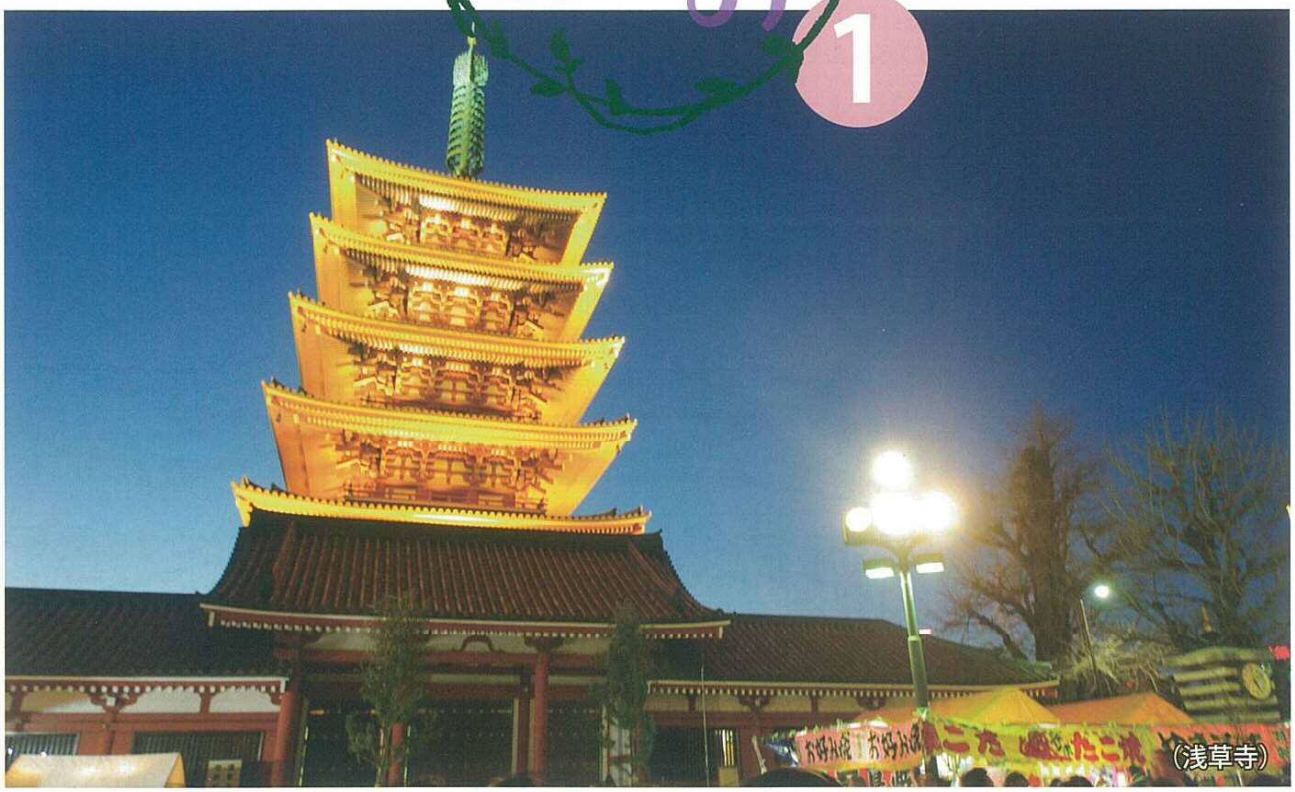
南無阿弥陀仏は
私のいのち

えこお

平成28年
1月号
NO. 456

1

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
http://saitokuji.tobiiro.jp/
発行人 脇阪 義幸
印 刷 日生印刷(株) 03-6863-3263


(浅草寺)

曇った眼

昨年、私の父が急性心筋梗塞で倒れ病院に搬送された。直ぐに手術が行われ、なんとか一命を取り留めた。その後、予想以上に回復し無事に退院となり、現在は食事制限等があるものの、一見すると普通の人と変わらない生活を送っている。

しかし実際には、心臓のはたらきは健康な人の半分程度で、重い物を持ったり激しい運動は禁止されている。見た目からは全く想像もつかない事だ。

ところで、私たちは人と関わりを持つ時に、相手の何を見て「どんな人物であるか」と判断しているのだろうか。勿論、自分の目で見て相手の顔や身体を認識することは出来るが、正直、中身までは分からない。ましてや、その方が現在に至った背景などには目もくれないだろう。

問題は、相手に対して勝手に作り上げたイメージがその人だと思い込むことである。妻と結婚する前と後では、随分違うと感ずる部分があった。連絡をまめにくれるタイプだと思っていたが、結婚してからは殆どない。そういうところに思わず不満が出る。相手のイメージを勝手に作り上げたあげくに被害者だと主張する。兎に角、自分を正当化してはばからないのだ。

本当に人と出遇うとは何なのだろうか。自分自身を見失っていることに出遇うことかもしれない。「確かな眼を持っている」と自身を疑わないところに、いよいよ迷いの深さを感ずる。

(大橋 伊知郎 記)

年頭所感

住職　脇阪 義幸

謹んで新年のお慶びを申し上げます

昨年 12 月 1 日付けにて当寺住職に就任し、全てのことに戸惑いと不安のなか、お陰様で今年も新しい年を迎えさせて頂き、初めて当山の修正会を勤めさせて頂きました。本年も大谷師同様、変わらぬご厚情とご指導を宜しくお願い致します。

大阪の自坊山門横の掲示板に、毎月 1 度新しい法語ポスターを掲示します。年の瀬に「**わかいいのち　今年もあったか　除夜の鐘**」、正月には「**元旦や　今日のいのちに　遇う不思議**」（真宗協和会）の法語ポスターを貼りました。年末年始は、特にあらためて『賜りたるいのち』を感じる時ではないでしょうか？

そのように頂けていない私が、今年もここに置いて頂いております。もったいないことです。

今年も「西徳寺のあゆみ」に皆様のご参加をお待ちしております。

西徳寺報恩講

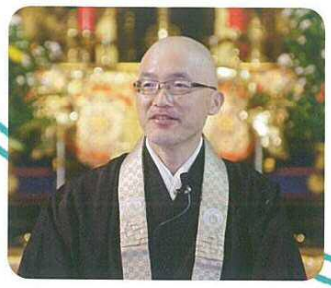
「苦を超える道」　布教使（ふきょうし）　隅谷（すみや） 俊紀（としき） 師

去る１１月７日（土）８日（日）、西徳寺におきまして親鸞聖人の報恩講が勤まりました。両日にわたってご法話をいただいたのは大阪府・堺市・高照寺のご住職、隅谷俊紀師でありました。

ご讃題に「生死の苦海ほとりなし　ひさしくしずめるわれらをば　弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける」というご和讃をいただかれ、親鸞聖人は私たちの抱える迷いを生死という言葉で表され、苦悩の娑婆世界を海で譬えられました。私たちはその苦悩の海にしずんでおる存在であり、阿弥陀仏はこの私に誓い（願い）の船を用意してくださっておられる。その船に乗ることによってのみ、迷い多き人生をいきいきと生き抜くことができると述べられました。

お釈迦様は「人生は苦なり」といわれ、生老病死の人生は人間の思い通りにならないのだといわれます。『仏説観無量寿経』における「王舎城の悲劇」に、出生の秘密を知った阿闍世太子という息子は父親である頻婆娑羅王を牢獄に監禁して餓死させ、母親である韋提希夫人までも牢獄に幽閉したことが説かれています。全ての自由を奪われ、救済を求めた韋提希に対してお釈迦様は、牢獄から解放するのではなく、牢獄にいながらにして仏法を説き、韋提希を救われたのでした。それは苦悩に憂う場所から逃れるのではなく、苦を超えていく南無阿弥陀仏の教えによって、苦悩の現実を引き受けていく道が説かれました。

苦を超える道とは、苦をなくすことではなくて、苦の原因があきらかになることです。自らの思いが自分自身を苦しめていた、それが本当に自分のことだと自覚される。そのことが釈尊の説法によって明らかになったのです。



東井義雄さんの言葉に「これからではない　すでに救いの御手のなか」とありますが、弥陀弘誓の救いとはこれから私の苦悩が解決するのではなく、もうすでに救いの船に乗っていることに気づかされることであります。私たちがお念仏を申す生活の中に、すでに阿弥陀様に願われておる。お念仏の中の生活に私たちは生かされておる、ということに気づいていくことが救い（聞法生活）であるとお話くださいました。

（木村　専正　記）

親鸞さんのことば

親鸞は弟子一人ももたずそうろう。
そのゆえは、わがはからいにて、
ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、
弟子にてもそうらわめ。
『歎異抄』

松井憲一

教えられている人に、教えられることはあるが、教えようとしている人に教えられたためしはないといわれます。それは、面と向かえば「他人(ひと)のこと、自分勝手と　みな思い」となって、自分の勝手さに気づかないわたしたちに、同じ方向を向くことの大事さを教えるのでしょう。

教えは、教えられた人にあるのですから、阿弥陀仏の教えを聞く仲間は、同朋であって僧伽ともいわれます。僧伽は、和合衆・和合僧と訳され、教えに生きる人々がお互いに影響しあいながら、個性を失わずに「一味に和しているグループを指します。それなのに、あの人は「わが弟子」この人は「ひとの弟子」という争いが出てきたのです。

そのときに、いわれたのが、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」です。人が人を教えることはできないのに、教えられると思う夢は断ちがたいのです。中国の善導大師が、二河の譬えで「汝一心正念にして直ちに来たれ、我よく汝を護らん（『教行信証』）」といわれたように、道を求める者の前面に響くのは、救主である阿弥陀仏の呼び声です。そして道を求める者の背面にあって「仁者、ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難無けん」と押し出してくださるのは、教主であるお釈迦様のお法りです。

こうして、師や友に出遇って指導者意識の傲慢な夢が破られ、向きを変えて阿弥陀仏の呼びかけに応ずることができるのです。それで、聖人は「そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろう人をわが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。（『歎異抄』）」といわれます。ここに、家族中がお仏壇に向かって座り、南無阿弥陀仏と申してきた伝承の尊さが思われます。

「夜と霧」の精神科医の著者フランクル氏が来日された当時、案内役をされた浜松医大の永田勝太郎教授が、二十歳離れた妻エリーとの仲のよさに感心し、帰られるときそのコツを質問しました。フランクル氏は、「男と女が出会う。アバタもエクボだ。これはだいたい一年続く。二年目になってくるとアバタはアバタ、エクボはエクボになってくる。しかし、三年経つと、今度はエクボもアバタになってくる。それは、二人が顔を見合わせるからだ。夫婦というのは同じ目的に向かって、同じ方向を見ていけばいい。」といわれたそうです。それは、ナチスの強制収容所の人々の行動に教えられ、「よき人は帰ってこなかった」という、生き残られたご自分の深い懺悔からいわれた言葉でありましょう。

聖人が「弟子一人ももたず」といわれたのは、「もてず」でもなければ、孤高の塔を守ろうとしていわれたのでもありません。多くのお弟子に囲まれたからこそ、「是非しらず邪正もわかぬ　このみなり　小慈小悲もなけれども　名利に人師をこのむなり（『正像末和讃』）」と、名をあげたい、人の師になりたい自分を厳しく見つめていかれたのです。それは、生涯南無阿弥陀仏の一念に、阿弥陀仏の教えの前には人はみな平等という仏道の基本を確認しながら、仏弟子の道を歩み続けられたことを示すのでしょう。

念仏するのは、拝まれる者になるためではなく、一切を拝める者になることであったのです。それで、「如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。（『歎異抄』）」といわれたのです。

山門の言葉

親の心、子知らず
子の心、親知らず

わが家に第一子となる娘が生まれてから一年三ヶ月が経つ。子を持つ親となって、最近思わされることは、「親の心、子知らず」であったなということである。親の恩、苦労ということは多少分かっているつもりであったが、親になって初めて、親は子である自分を育てるために、こんな苦労をしていたのかと思うことが多い。それを知らずに親に逆らい続けてきたのが私であった。

今月の言葉、「親の心、子知らず」ということわざは知っていたが、その後の、「子の心、親知らず」はあまり馴染みがなかった。驚いたのはどちらも〝知らず〟だということである。

この言葉を通して自分自身を考えてみると、常に自分の立場、自分の置かれた状況により、自分を中心にしか考えられずに、外にばかり責任転嫁している私の相(すがた)が現れてくるようにも感じる。今ここにこのようにしてある、その現実は人それぞれ違うのである。その違いを受け取れないからこそ、争いやケンカが起こるのではないだろうか。

子であっても親であっても、変わらず自分の心を中心にしか考えられない。その自分に執着する有様を、我執という言葉で教わる。そしてそれが罪であるとはっきりと照らし出すのが、仏のはたらきなのである。

このことは親子だけのことではなく、その他の様々な関係の中でいえることであろう。様々な関係から我が身をいただいていたのである。関係存在ということ以外に我が身はないのである。その事実を見失わせているのは、自分自身の我執であったのだ。我が身を知らずに私をたてていた。今月の言葉は、まさに私の本質を言い当てている言葉であった。

（仲井 真裕 記）

えこお志お礼

練馬区　白倉 一弘 様
北区　小山 光子 様
新潟県　鷲澤 大雄 様
品川区　市田 幸子 様

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせて頂きます。

日誌

１１月１５日	城西ブロック会聞法会（中野商工会館　参加者１９名）
	台東区合唱祭（西徳寺エコー　参加）
１１月１７日	仏教青年会報恩講　講師　鷲澤 大雄師
１１月１８日	婦人会日帰り旅行（高尾山方面　参加者２６名）
１１月１９日	『唯信鈔』に聞く　講師　宗 正元師
１１月２１日	定例聞法会
１１月２２日	城北ブロック会聞法会（大塚・大和田　参加者２０名）
１１月２４日～２８日	本山御正忌報恩講　出勤
	復演・御堂布教 大谷、御堂布教 木村主任、御堂式務衆 蓮井・仲井
１１月２７日２８日	宗祖忌
１１月２８日	同行会「現代の聖典」に聞く　法話　大谷 義博
１２月５日	同行会「現代の聖典」に聞く　法話　大橋 伊知郎
１２月７日・８日	中興忌
１２月１２日	社交ダンス練習会、混声合唱団「エコー」練習

さっとくじ婦人会だより

第316号

新年のご挨拶

今年の法語カレンダーに「ひかりといのちきわみなき阿弥陀ほとけを仰がなん」とありました。

父母がいて祖父母がいて、そのまた父母がいて・・・。何百年か何千年をさかのぼる中のひとりが欠けても今の自分はこの世に存在しないと、当たり前のことを時々考えることがあります。祖父母以前の祖先に逢ったこともないが、今あるこの命。生かされて生きているこの我が身を与えていただいた祖先に感謝をして、今年も聞法を通して生きる意義を皆様と共に学んで参りたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。　（婦人会会長　太田 愛子）

～法語カレンダーに聞く～（2016年1月号）
「十二のひかり放ちては　あまたの国を照らします」

阿弥陀様が私たちを照らし出す光のはたらきを十二で表し、その光との出遇いは私たちの抱える闇、陰となって知らされます。むさぼり（貪欲）、いかり（瞋恚）、現実を受け取らない（愚痴）心が止まない日々の自分自身に気が付いて欲しいという願いであります。

光は具体的には人であります。例えば、嫌なことを言う人は自分の見たくない姿を照らし出す人だったりします。作家、吉川英治に「我以外、みな我が師 」という言葉があります。なかなかそのようには行きませんが、遠ざけたいことの中に大切な呼びかけが隠れているのかもしれません。　（山崎 哲）

次回聞法会ご案内

日時　平成28年2月17日（水）午後1時～3時
場所　西徳寺　星月の間
法話　標語カレンダーに聞く（真宗教団連合カレンダー）
「生きとしいくるものすべて　このみひかりのうちにあり」
最高顧問　大谷 義博・山崎 哲

ひとこと

ご縁をいただき、「恵信尼さん」と題するオペラを見せて戴きました。作曲家の仙道作三さんは、今日は高齢化社会の終末をどう迎えるかという問題、格差社会拡大という課題に直面しているが、それは750年前の乱世と何ら変わらないことを恵信尼さんのお手紙から学ばれ書き上げたそうです。

仙道さんの親鸞聖人への思いはもちろんのこと、親鸞聖人が自力念仏を纏う我が子善鸞を案じる姿が描かれており、熱いものがこみ上げてきました。　（金子 桂子）

＊恵信尼…親鸞聖人の妻
＊お手紙…『恵信尼消息』。親鸞聖人亡き後、実娘とのお手紙が残っている
＊仙道作三…(1945年3月24日～) 秋田県雄勝郡羽後町出身の作曲家

掲示板 平成28年 1月

元日(金)	午前６時	**修正会**
９日(土)	午後１時	**社交ダンス練習会**
	午後３時半	**混声合唱団「エコー」練習**
１０日(日)	午前１１時	**婦人会新年会**
１６日(土)	午後１時半	**定例聞法会**
１７日(日)	午後３時	**評議員会新年会**
１９日(火)	午後１時半	**『唯信鈔』に聞く** 講師　宗 正元師
２３日(土)	午後１時	**社交ダンス練習会**
	午後３時半	**混声合唱団「エコー」練習**
	午後５時半	**同行会新年会**
２６日(火)	午後７時	**仏教青年会『歎異抄』に聞く** 講師　宗 正元師

城西ブロック会 聞法会

去る１１月１５日(日)、中野区商工会館において、今年度２回目の聞法会を開催しました。参加者１７名を得まして、活気あふれる聞法会となりました。

聞法会では木村主任から、与えられたいのち（生老病死）に背き、自分の尺度(分別)で生きることが迷いであり、そのことに全く無自覚で暮らしている私たちを救わんとするのが阿弥陀仏の本願であることが語られました。

懇親会は４人の方が初参加となり、同じ鍋を囲んでお互いに意見交換をさせていただき、和やかな時間を過ごすことが出来ました。

次回は**平成２８年5月２９日(日)、場所は中野商工会館**の予定です。大勢のご参加、お待ちしております。　（木村 専正 記）

聞法会だより 仏教青年会報恩講

昨年１１月１７日に仏教青年会報恩講が勤まりました。今年は新潟県・大蓮寺副住職であります鷲澤大雄(わしざわだいゆう)師にお越し頂きました。

講題は「お寺に行ったら何かいいことあるの?」。この問いは檀家さんから尋ねられた言葉だそうです。この言葉を通して鷲澤師は、一体お寺や仏様の教えは何のためにあるのかを問い、改めて生活とは何かと感じたことをお話いただきました。

質疑の時間では、「日頃の生活は分かっているけど止められないことばかりだ」と、日頃の生活を振り返った方がいました。お寺に行くこととは仏様の教えを聞く場所であり、それは自分自身の姿を確認する場所でもあると感じました。（高橋 淳 記）

城北ブロック会 聞法会

去る１１月２２日(日)、に大塚・大和田本店おきまして、城北ブロック会聞法会を開催いたしました。今回は初参加１名を含む、１７名の会員の方に出席していただきました。

法話の中で大谷最高顧問から、阿弥陀仏の本願とは、人の上に具体的に表れるものであると教えていただきました。また、実際に南無阿弥陀仏の生活をしていかれた人を通して、生きるとはどういうことか、いのちとは何かをあらためて考えさせられたと、話されました。

次回は**平成２８年3月6日(日)、王子北とぴあ**におきまして聞法会を開催いたします。テーマは「龍樹菩薩 一 ～生きた教えを求めて～」です。大勢の方のご参加をお待ちしております。　（蓮井 邦宗 記）

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も宜しくお願い申し上げます。

かねてからご案内申し上げておりましたが、この度、12月１日付けで脇阪義幸師が西徳寺新住職に就任されました。脇阪住職のご自坊・霊松寺様は大阪市住之江区にあり、かつては本山佛光寺において内局出仕の職に就かれ、親鸞聖人750回大遠忌法要では大遠忌事務局長として、その手腕を大いに振るわれました。

これからはユーモアたっぷりの新住職を中心に、ご門徒の皆さま方と仏法聴聞の歩みを進めて参りたいと思っております。

（主任　木村 記）

西徳寺ホームページアドレス：
HP http://saitokuji.tobiiro.jp/
ゆうちょ銀行お振り込み口座　00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。
（メールでも結構です）
saitokuji@ce.wakwak.com